

開催日：令和5年2月15日（水）
開催場所：釧路合同庁舎 5階 共用第1会議室

釧路湿原自然再生協議会 第25回湿原再生小委員会 議事要旨

会議の冒頭、事務局から第25回湿原再生小委員会の発言概要と今後の検討方針（案）について説明を行った。

■議事1：幌呂地区自然再生事業について

（委員）

B区域の目指しているゴールは昭和20年代の空撮で見られるようなヨシ・スゲ群落を想定しているのか。

（事務局）

そうである。元々ハンノキ林だったところもあるため、そういう箇所を草地環境に戻すのが難しいと思っている。当面実施する箇所についてはヨシ・スゲの草地環境を目指したい。

（委員）

非常に明確になったと思う。水位が上昇することによって、過去からハンノキ林であった箇所も林床植生が変わってくる。そうなれば湿原の中の湿地林としてのハンノキ林とし、生物多様性という位置づけで評価できる。そのように捉えていくと良い。

（委員）

排水路を止めて水位を上げて湿地化し、ハンノキの生長状況を見ていくということだが、茅沼地区では水位が高いところで環状剥皮すると効果が非常に大きいという結果が得られているため、環状剥皮も同時に実施してはどうか。

（事務局）

まずはせき止めを行い、モニタリング調査を行った上で環状剥皮を実施するか検討していきたいと考えている。

（委員）

ハンノキの環状剥皮の実施は水位上昇効果を確認して検討するというのは冷静な対応と言える。基本的には受動的再生をコンセプトとしているので、水位上昇してハンノキが減衰していることを確認した上で、環状剥皮により自然の変化の方向性として手助けするという手段はあると思う。まずは試験的に限られた区間で実施するという理解で良いか。

(事務局)

B区域はI期工区の範囲を先行し、試験的に進めていきたい。

(委員)

ハンノキが減衰傾向に入っていなければ、環状剥皮しても萌芽再生すると思われる。モニタリングにより経年変化を確認しながら対応する中期的な見通しも必要である。これは環境省で実施している広里地区の低木ハンノキ林に関するデータが参考になる。

(委員)

林床にオオマルバノホロシやドジョウツナギなどの湿生植物があるハンノキ林も湿原景観の一部であるため、そういう方向の再生も一つの目標と考えてもらいたい。

(委員)

幌呂地区では湿原植物の群落を復元するというのが大きな目標と考えてよいか。

(事務局)

そうである。

(委員)

その中で、住民参加でヨシの移植を行っているが、ヨシは湿原の構成要素ではあるが、湿原植生ではなく水生植物である。もっと水位の高いところで優占する植物なので、ヨシを増やすという観点ではなく、ツルスゲ、ムジナスゲ、ヤチスゲなど中型のスゲ類が湿原本来の優占種なので、湿原＝ヨシではないということを理解してほしい。

(事務局)

ヨシは湿原植生の象徴と捉えてこれまで移植に取り組んできた。本来はスゲ類も含めた多様な湿原植生の再生に取り組むべきと理解しているが、住民参加ではヨシ移植に取り組んでいるところである。

(委員)

幌呂地区は昭和20年代の農地になる前の湿原植生に回復するという一つの目標があるが、事業地は農地と湿原に挟まれたバッファの位置にある。本来の湿原植生を再生しようとする一方で、西側丘陵地からの影響が湿原に及ばないように緩衝帯としての機能も期待している。明渠の埋め戻しが農地に影響する場合は対象外としているように、幌呂地区は緩衝帯の再生を目指した取組という理解です。

(委員)

緩衝帯の位置づけや取り組みであることを理解した。住民参加でヨシを移植する場合は、緩衝帯としてヨシ群落を創出するというネーミングで市民に伝えていただきたい。ヨシは水質改善を含めて重要な群落である。しかし、湿原植生ではないので間違えないようにしていただきたい。

■議事2 達古武湖自然再生事業について

(委員)

水質調査のボリュームが大きく理解が難しい。窒素やリンなどの数値が他と比べて高い、低いと言えるのか。周辺の塘路湖、シラルトロ湖、摩周湖などの湖と比較するデータがあったほうが評価しやすく、理解しやすいと思う。

そして、P.15のデータで出水時、降雨時とは何か。また、達古武湖と釧路川の接続点のデータはどちらのものを使用しているのか。もう少し理解しやすい資料の構成をお願いしたい。

(委員長)

他の湖と比べる上で、どこの湖が適格かなども含めて事務局と相談し、データを出していきたいと思う。

(事務局)

出水時は、降雨が10mm以上あり、2日以内に採水した場合のデータである。水質は昔あった木道橋地点で行っている。

(委員)

比較できない数字が多く、変化を捉えられないケースが多い。水深が浅くなったというデータが出ているが、水位は変動が大きい。深さというより底質の高さ、標高で評価

することになると思うので、評価できる単位に直していただきたい。

また、負荷量を求めるときに流量も計測しているのか。

(事務局)

深度分布についてはデータを確認する。基本的に水位計については全て標高データに換算した数値を載せている。

流量観測については、平水時と出水時に流量観測を実施しており、水位-流量の関係をを使用して水位連続観測から流量を算出している。

(委員)

達古武湖では内部生産や巻き上げ、底質の溶出など様々な栄養塩を作り出すきっかけがあるが、全体のバランスがどうなっているのか一度整理してほしい。土砂を撤去することで改善したということなので、どこの栄養塩が効いているのかを明らかにしていただきたい。

(委員)

資料のP. 30~31に示している窒素・リンに関して、ST9・10、ST1・2では濃度が高いが量的に少ないという状況で、ST3~8は量が多く、複数箇所から流れ込んでいることは理解できた。この観測結果と社会的要因を関連付けて説明してほしい。

(事務局)

資料P49~50に各流域の土地利用割合等を掲載している。ST9・10は落葉広葉樹林やササ草地等が多く、STR1・2はカラマツの針葉樹林、植林地が多い環境となっている。ただし、2004年の土地利用図の情報であるため、最新の状況については把握できていない。

(委員)

達古武湖ではヒシをどう見るかが問題である。釧路地域ではかつてヒシは薬草や食用として利用していた。現在は達古武湖の水質や他の生物の多様性の観点から注目されている。水質に囚われすぎるとゴールが見えづらくなると思う。相対的に達古武湖という湖水の環境を我々がどう捉えて、ヒシと他の生物とのバランスをどう見るのか、何を求めていこうかというところに視点が必要と考える。ヒシは一年草だが、種子をつける時期が長いので複数回除去を実施しなければ対処が難しい。ヒシをどう位置づけて対策していくかを具体的に考える必要がある。協議会までに有志で集まりワーキングを立ち上げて議論したほうがいいのか。

(委員)

別で会議を設けるのであればぜひ参加したい。基本的に、ヒシの除去は相当慎重にやる必要がある。また、窒素が減りリンの変化がないということであるが、収支を求めると底泥に問題があるように思うので、次期に調べる必要があると思う。

(委員長)

計画の追記案について意見や質問などある方は、2月末日までに事務局あてに連絡してください。

以 上